吉備温故

无巻數

和書門
類
二九二七二號
一二一函
二架
六九冊

内閣文庫
和書
類
二九二七二號
一六九冊
一七五函
一一架

内一〇七七三號

内閣文庫
番號 和 29272
冊數 69（53）
函號 175 182

国立公文書館 National Archives of Japan

吉備温故巻之

紀事六

中山備中為村要ニ依テ宇喜多討取事

穝所元常ニ討取并穝所乃口藤博乃事

浦上政宗父子生害并清宗離居之事

宇喜多ト松田和睦并三村家親備前ニ御事

三村家親作州ヘ御并馬場高忽之事

三村再作州ニ御并家親討ルゝ之事

三村五郎ニ御紙伍多之帝家段討死之事

宇喜多ト毛利家ト和睦之事

内 一〇七七三號

五十弐

一 澤田村明禅寺城廃城之事
明禅寺合戦備中勢敗軍之事
金光浪々来中島当宇喜多ニ降参之事
宇喜多備中國ニ働之事
宇喜多直家子ヲ専去原事
宇喜多松田ヲ討金川落城之事
[illegible]景勢と宇喜多勢と片上七里居之事
宇喜多備中斉田城落城之事
直家勢と毛利勢と作州合戦宇喜多勢引勢之
事
出雲国松山総手備中御手当毛利勢御出馬之事
宇喜多金光与次郎宗高ニ殺害事

内閣文庫

備前軍記巻第三

内 一〇七七三號

中山備中島村豊後浦上宗景為討取事

邑久郡砥石城主島村豊後守貫阿弥と道號す沼城

主中山備中（或曰内山城）殊に内通して宗景を背く此

二人の事を宗景兼て心付内心にはすこしも不平の

合點にて隙なくして近付行事を遂け所もさへし

て漸く取繕ひ二年の春に至り宗景島豊後か所領

を島村か父子に申し別自筆の文故も取返し備へ

る凡諸士も兼て宗景表を宗景も兼て聞し事

なれとも頻て此事を深りて何かして討果しと

かまへも真家若党て豊阿弥か事は某か祖父乃代
よりも殊に傍に召仕へ子迄附添ふて召しも真
時宗景乃日来も望に任せ給ひし上洛か留中山
備中も深く乃守られ給ひは討たるゝやと仰せも真
家若党足も其流江湖及ひ帰るまでも君乃御
為にゝよ好も足又也不なりとて附て来りは一
しとう事別ゝ宗景其尽義か忠勤ぞ叶ひて中山
備前深成に事必一人に任せる内深く深く
危くもし人数かも討され所乃鎮るも有りけよ
小に能まもりへとて帰り常顔真家宗良殿乃城

は帰りて二人か危くなりし留中山か方は一入祝
く歓こしても亀山城乃沼より東葉園細と呼ふ所
に小四葉亭か作り真家数生野迄りにい所亭に
俤ふは中山かも所所に呼て数生乃家か宴して
料理し振舞ける席に其かまへも備中弥沼か是り
て至く到りか慈て沼城より参葉亭に俤構かゝ
けんと云ふ其家悦んて構成掛けり其像を持寄く
假亭に於て酒宴に及ふ真家深志酔しぬと思ひ
宗景に密に告て宮子迄る事も猶中か附き好み
く覚るさまを呼しても嫌ひかゝ拂て於家かおは一し

其時梶原方には使として中山信平源太有之〳〵付
景季は信月中如旅立し梶原源太ゝ帰り来りて
景季と謀て梅が枝の国を欺きしとの事なりとぞ
源へ事を(へ)しも時源太が妹も討取らんと密に依
りしけるを宗景が揖写の急に驚て縛せかる
らせる二月の事なりしに無の如く沼村急にて
其家離れして叢に及て浪葉家には其夜には子を
に源太は又り源義が別当深夜に及て一つ信平も
是に密して今夜を底もやう皆共に中通るかるを
と云しが其家幸の事と思ひ女行らせ其に通る

伴ひ家来を連れ一〳〵にて信平来り〳〵其が時
が今夜を妻と一宿を極し皆帰る迄〳〵と示ちを
信平にも当の士共皆休息させ女童二三人酌に
かましし計りにて打寄物語して種夜も更けて
山休ろへと行きも信平寝所に入らんとする所
に其家の物共り出を狩りなせて捕打に信平が
切ると切りけるなうり結がほらんとせしが総他の若
が取武器〳〵がし戸口をき門かの内にて其家の
家来が隣に無く深し事なりしを捕りに思ふ秘し
に隠まし其家の侍が肩迄切られ捕手の家来を

思ひよらぬ此事誰が故とも知らずかゝる事ゆへ十方にく
れて迷ひが宿りて切数し郎所に婿が家に
行しに則ち彼が高の修せしが起りし家業より福富と成
りし事なりし人多かりしか兼て志めし事なれば浪村
の横尾の婿と使として同く浪婿と成り東家に力
を合せ無地の如くして此物如何にも見えし貴人の如
く深き事にて知りし者なき士七八人を連て浪婿と
共に来り見る所に婿門もなし然るに静かにて扨こそ
浪村婿中へ案内して門に至りしこの女斯様に入り
東家を尊みて深く参る者不事あらん貴人の所に郎所に

新数し依の郎者に来りて手当所者を横にして数
年の其路より来りし浪村の家来共を道にて代
知りて浪村の内浪婿にて東家の店ありし様なる
事して自分に東の横尾婿と云ふけ跡は扨も婿
中の名々悪く浪婿と祝儀にて語る者に於て斯様を見
かるを手に東者もなく東西へ婿が家を見ても
東家の浪が家にて何とかに出る者の事なく天離山
へ浪之行しは家業なりて是宿り行りて浪婿が東
に東家に婿は中山の村にて不思議にも通りあるを見
ゆるに知りて浪婿く帰り京に着て子の婿が上

家長朝臣して守らるる楠家を祖父の代君に仕へ
討又長船山より荣地様として銘に備前も多く
あるるて長船兼光為として長船之長光
山の打て物なと吉光自らの打けられて今物
し而る物所所以て楠家の長打列ぬ入道守らる
る所なれ多し

楠木元常打する事　銘に備前の事

入道銘銘の作の備前之福木備前元常作りて松
田之属して作ら長打作られて後の備より守
田七郎無衛忠家打出物として長船三郎近景

其打して長打作れたる楠木備前　作元常之印中備前守文安
戦の時楠木て討せし楠木深尾北　備打して竹田
左衛門之助孫なりとかふ
以景の出之作りて銘る守吉多の元年長船近景
追為上て作れる備前忠家之勝作之討て乞
り長打も追為きへく備前ては後元年の長船
近景打く見て延して元常之備前より出所備之
楠木入野てり如其を備前是に切たら出作世し
して作りの景打とて引返く守貞多勝も之道の
楠木其上には長く送り備前ます右引見れとある
於ける楠木備前和田の城主和田新兵衛年十九歳

容顔美にして心も剛なりしか兼て元帯と男色
の契ありけるを此度敵の押寄る二十騎計りにて館の
外郭搦手にて郡か指の甲軍既に有る所へ進み来
りて内より鎗をもて討てかゝりしか揃ひしも漂田
右家の旗下も先手と伴ひ手とりて互に一度
に語ても御所五日も兼て存せしに伴ひ入る
とゝに陣へ帰りける旗も近習とも其手走を
人数多く出して大勢すると争ひ其上の羽
陣とて其世西に峰嵯として扁風城え苦戦如く
山下に古河より坂を事もなく流れ

田の山に続きて要害なる陣なれとも力攻に大
軍の兵士の援もある計りにて攻兵事を叶ひけ
れとも謀あれは攻よりかは如しと長根の三郎謀に
て要家へ申まゐらする譜代の家臣の中に容顔も上
く心の健なる者を撰ひて敵の陣中へ入て討
取らするやうへしと精兵男子けるを男色にふけ
る者なれは其形なるを十人として七八日に討取
まさる者しと是て関清三郎か要家の傍に居まう
しか是やりて申けれは右家も合に打てかける
て兼て此度兵等来り一二月と云

て冨清三郎事ふ為乃密談行り其観き考とりき
ありし事なりとも訴へきと構内にして此様子に於
給せんと欄て押出手其以前事柄ある事とも
ハゝり様を清三郎家ていろゝ事故へいかゝきと家
老ともに振らしむて東家の内物ありて立ち出て市中にも至
ニ此の者息子の以外三郎より外の家老を密計
於ゝ実を聞けれ為ゝ聞りけり為ゝ常眉ありとてふ返
きゝけ冨平内に兼ねてといへりて相議して去りしや
ニ付て東家中に至り為を御清三郎か密に囲切に
申すせ前後て人を呼て翁乃好乃様に入志よよ

謀を清三郎にあかしけく云吟せ玉ふりと申せし
平内ねて密に清三郎を囲越かしくて為しあり玉
時に清三郎が様外くかしくて謀せよとて宰相
其並清三郎兄定を当の者行きまて以くとやけ
まを其家ありしに思て即時に宰当物とかゝ給ふ
りけ様相平内一様かせし清三郎か翁の心を様
の川向敷居原り平内に其地中ふ其の信の茶屋
お後て信市子者あのなまを是物事と様ならて玉
屋に隠して居て信宮物あて翁の心の事にせんや
か何ひたる或時信紙様下の川へ細かり川せん

是を見て怖りしが継地時節と清三郎も川岸迄
も薩摩にて兵の如く走りし行中に市郎治郎
至る岸に兵の如く弥市郎走りて人の来りし
見世先にて其人俊にて中なる事年の十四五なる
家の人の兵の如くてにも何れも治郎さりし
折て見兄とて己が鉄砲の作如着十艘程小性子
川ぼ門の飾無し其傍に六七人の舟が川向の岸
に居れて薩摩に折て只今清三郎も信兵の如く
呼て飛来る白地綿のり刀服着ましし走寄
着之九郎は訪ね者し薩摩地様の治郎も男気な好

うき然清三郎が傍に寄て問ふは薩摩清三郎薩州
家の膳にて詳き居へ帰りなんとするに治郎
胸がうけて川岸の辺にて如何なる人か知らる
市と来る者れ市も是り様は其のとほりし兵の如く
去りく弟の薩摩如し紅葉の顔の如く様を知りと
行く其清三郎薩摩の手が清地治郎はさてこそし
諸共に也と是は其者来りと新治にて侍人来りし
與清三郎と申すらう野田の志とさらくつとして
云實の羅が更己に無縁に逢相薩地が其老若の
か傍がくらく酒を盛うに旅しりて危き事に似り

かへさもよろこひなく渺し無紫庵にまかり隠し
到て左城中意に申ても案する也く人ぞ城中に
来る者なしと申ふ事もなへしさるい以うち振て
も皆をうちひしきなれは頼みまいらせ其名を
思て固く守り居りし時いとゞおほゆ治部留守
なれはうへ清三郎ゆきたりし母の妻なる事を書に捨置て
さ以うち新しき通路又治部少輔人に任せん
を以と頼り留し如し陳てつよ悔りけと
思ひ越りて侍て頼りし如菱十箇なりかくへと招
きて如く惣兄事なきなほ人なき侍て捨置なんにも以

と頼り留む又ふ偏にも頼む事陳て清書偏なん
城中より来りし者と以くても野心なくとの事思き
親の事にも陳りたる以くとを十箇をて城中の者
こゝ訴ば親子の者と以く二も以うたひ事留
行尤うりしと陳書にも実に今の事をとして野心
なかゆふも如りて其時手と到て如何なんと行り
新子事行は思ふつを膝と傍と清をて城中へ除
なかなか接をも如何人なくと非なる徒と曲て云ひ
十箇もかくれは清郎なく者も留り清三郎に自
らさしい三年の經ね如くも小思し重く清て陳

中〳〵なる一しとなりの悲き守信か孫子に寄り
東花へいひうて以なといやまりし人傳に流れ
来りせん若くし一先座まへと東由清内せ明る
おもなし自とやせる若き良の事傳り崇しうる
念きとも傳にかし郎其一人捕縛て去しやうそ
去ゆりの是を別川違て此の身とてもと打乗り
樹とゆりて男とく會せんと思へきも敵中の
去る初なし酒斗りてき毅しと下と見知保
見をささうて男とくも斯きりしと川の捕れ
へ唯とお乃そ事の振りのおゆしと清三郎の拙僧

せしかおしも違ひなく悲き骨を絶ひもやけて
男とく策盡し我妹宇川主人の妻も附くうとく
ありて唯清三郎と伊藤もりて離部以の事歎く
なるも皆差を事と見ひ者隠者見な深きみの蔭
十歳な和田の捕くきりて者隠伊織お類異見な
如く如とむへとも実に唯の悲き清三郎か心痛
お満ている実と此心なと若者と行て清と言放し
て見知悲しうる三己に事の時の浪の様なて云
清もあり此祖し者の思ひの言倉女お清三郎さる
て己か母と嗚へ乱て去しお浪様よりは悲しい

祠の内の境に営ひ置清三郎母と称して此を定
路に使へける童か背に深くあつてつゝき背負
の年をて老尼共も驚かれし嘆しの思を哀情を
深きも深くさるへ珍清歌を折々唱て清三郎
のことあかはとして酒宴の席なし清三郎も情あ
行事ことあるて心痛にも無けりあは清う人の狂
き目に見えたるを清談如くさとり行くハしと感心
主君も亦く三郎も此年に乃振分坂見て定
親子心と行と古く称て月日も経の事を定
憐心あらく身も無殊に清三郎見たりし所縁四年

二月半の比暑に随て境の北の隠居子家み居
深み行て阿武坂見りし清三郎と共に三川に
此絶数寄に分けて消磯し清三郎と続に梅り
あし時に嬌しくて脚りの狂言所にもあまりて人も
あるまで何て見時定ありて見ゆ清歌の振
持例に如く高銭引導世心もるに判逃し岸所為
し積に物起て岸御包み川の男子誉た崇敬
淫汲の行う折節下りて川縁も繋ぎて行く後
歌の川遊ひ哉法小舟の行きに川導せ岸に兄か
按文流る此て来るんと来るあく寄川泉門寺

が呼かけ源右衛門とて見えて主人弟を始て是が
しまいに清三郎が不意なるへしと清三郎が敵が
切かゝると二三ヶ所手はかり捨て是非追かけて見せ
無の波に打寄物凄くしか清か有て追行
二三町の所にて追付けてとうとう清三郎振廻して
切付しを右門か腰の所ほりとう右の肩先へ切さ
けゝれは清三郎か肩先より切付所まて切まへとも
痛手なれとも二ッ三ッ刀にて右門か肩先を切付返
さえて切捨て右門を時のま十五歳なりしと
然る所を捕へたる清三郎と申者の由を申上

捨さしけ川ありけり打付けり追掛捕へんと弥増
ゝて跡を追へ共も時も近ひたりを早縄かけ之し
て清三郎を生捕ニ〆清の捕へを呼りける処へ清
三郎か寄手内より脇差を抜出して右京
か前にありて跡先々首を打けり右京土蔵ひま
薬ぬ御手にて其御家来衆付合せん年銘北年ありし
送りに教させや其まゝと不便とおひ右京けし
能くも打立まりしと是非も無くして当御手にて
不明の日合前髪ありしこて右馴脚とも名乗せ
之けり梅鉢の紋付の衣類山にて寺殿が集め

て主人の生害見て悔ぬとも其甲斐なし　御誓に
報し早川なかりけん事を成就して帰りし唯の体
入婿せて兵二の一騎して討死せんと云ふ者も
なり和田の妹を伊織か振て大将として介錯体
せんとも叶ハと其妹か振て顔のハ妹ニ介錯せん
事も知らしと云ふにまかせてハ新山ハ兵部か大将と
して楯籠るへしと評議定て一先穏かならん居住
頼りける体よりも新庄ニ越して顔のハなお住む
なとまかりなる元の兵気一あらさりして防御も叶
さるハ又候家元も手は見て出ハ兵部も介錯まで

事かなくさまーさとも老臣の身なるにハ士分と去て
家臣ハ事も面目なく思ひて出人ゑなく三曲掃除て
腹切て果つ、事あらハ後悔なるなれも言なく数多の
家来て宮兵多勢入ぬりあらハ士卒の族ら一時に
焼払ひ去り和田の妹なとも討取帝主の和田伊織
ハ家て其川の妹ハ去去逃亡致
一説ニハ同居の弟一旦親の妹の川向の北
妹を渡り本堂前へ走り出て後彼家ハ落へ申しけ
しかとも其時以後ハ行方知れて母とせしは乞食如く暮らして
右川原にて切殺獄門ニ懸る事ありとも申し

一 又一説ニハ治部か許しト号本格と云といふ
み続乃代乃墳を横石治部か師経といふ又ハ
とも称みと派せしを重治となりし如し号別ケ
於治も安部か小さ孫太郎と成て後ニハ号信
鏡といふ初日隆木治部ニ男女性子川を門能
ナル所ハ世乃川端ニて清三郎と号是ハ今ニ於
三布ニ別葬て墓塚有も有之と云所也但し

御五治宗父子生害并清宗敗走之事

御五宗景乃兄孫部助治宗を横別室乃墳ト在り

其子も其性得子ありしかと宗景と世ありけれ
て弟ありしかと其治宗乃嫡子か小次郎といふ一二
云 口印 晴治乃墳を三田安之助か許か小次郎妻と
して永禄七年正月二日婚礼行ありしか其夜乃
謀叛か小次郎乃妻治晴治により見かけ入来て治宗
と小次郎ともそれか数寄をもすまでも小次郎か二郎
於郎清宗と云者あり是を其居所也て河宗深三郎要
云をて家乃墳か永治よりか数 治宗乃 秋本と云
沢名を孝次 三年内乃嫡如を方三郎太郎乃妻と
しても 男女一人か生を安か久松といふ 御子り

以後河原か天神山の宗景より語りて三郎九郎
か討て出しか共不能か当与へしと成り其志
是ゟ出して永禄十年五月十八日伝の夜三郎九
郎か鉄して源五郎も天神山へ忍ひ入源五
郎々母かも家に残し置まりしか年判を志て殺
さ其仕経天神の狩敵に源五郎兼て難乃上手て
て候其由也

三郎其嗣りしかも此後河原家附親類難之節
三郎九郎は伝家次を以て自から絶にけり
天子名松御年ましくて家にも
住ゟ次くて小波より来て仕経共乃時に

宇喜多直家備前へ出しか三年也…
宇喜多と松田和睦并三村家親備前へ働く事
松田左衛門佐元成か娘を直家の弟に嫁し西備
前か治りしより後其代に備之と云ふ敵より出
宇喜多と敵の事際なくして直家へ属して有し
に其年直家家老明石か松田より手勢を以て
頼み候て直家より和議の事を云やり其使を以
頼まして是よりも宗景か添と相劉松田為
直家か娘天神山へ出仕して直家の娘二人所り

しか宗景の方ありて一人ニ於て女婿子嫁し
一人ハ備州三宅の城主浅越播磨守備元妻とし
ぬきしむる備中高梁城主三村紀伊守家親舎
弟元範の庵へとなして備州小部ヶ嶽の城主佐
野美作守とへ縁をなし此子息国の
近辺をなびかせけるを松田意備中へおいて古北お花
ケ者率し向し今を戻る書て雲石備田一揆す
ありけるを三村とも兵かく兵を繰り開かね
ト浅口松田あるも討まやしも毛利家へ亡け是を元
就頼みて安芸ありて住吉良しとて備中へ三村と

備中をなけるさて三村備中へ備ろ皆ハ松田を守
兵自ら和睦し備前へ屬して備中へ備へ一とを
皆へ次第を従三村備前へ備わて宮山の城か攻
再山の城を攻て是まで三郎従へ兵を高来し
修築させて備中へ備えりと

三村家親備州へ御馬揃為居之事

三村紀伊守家親備州へ乱入年三月二ハ備州へ出陣し
て浅越播磨守備元ニ三宅の城か攻て備元之天
神山の庵か付て是家の兼ね是を加増として

西家より了協次郎六郎に足軽を添て是を敵陣
堀際を塀中よりも竹を以して日々迫合行り
五月十四日次郎四郎當岩雑兵の為り塀の前の
川に於て休憩しける敵を見て立伸へり
其足が乞して押寄り塀下一人出違て敵と落
我をみかて敵がへらくて落服が法次郎七
郎は足を見て一手と打る二人に敵へ突てか
かる旗りに背乃迫合を敵五方旅仕り両本刀
を振て切て出り是を落を抜て次郎四郎足を
落て家臣是を本呼して迎り子敵一人落を挿て

出しまへを落が合せしかば難儀が屋世喜多敵
味方と揉合ひしに次郎四郎は旗が合て打掛
より寄てうしろ敵前後の敵が一方へ引かんとする
退て二人と鎗ふより進背が見て二本の旗が一
あり手取ことして旗さし中へ敵二人がうら旗
突旅て退くが追かけり一人の敵勝き働きしも
を立て押掛世前が本手敵二三人来りて
了協が冑がて引倒さんとせしが不が切掛し
み切てうしろを了協が首を取て長しし
手協をも敵等と追くみ敵十四五人計旗あて

引かへてりんへ手を繕く味方乃勢ニ而主を治的
四郎を引返て敵少し来るとも切掛して三星城
ト海り可得手懸も近く候主を請て少勢も
あらし翌日狂敵ニ書て兵多物陣半く射殺
井楼ニ而あかりて攻了候三村星ニ手術以候へて
因退ひ物
陣中より敵田舎二千歩門近敵地書て射込を
手術のいのり乃後き三以宝ニ而下さ去内
ひ候家親ヲ兵を
あとニ手行りて三村も後ても書不候陣中く

御り常様手柄後日四郎より可被為乃様手術之以く以
へ常主ニ是ニ存く宗景より感悦ニ而御さ主常様
尽候ニ而三星山下其外城極合難背く候委細
數々恩賞追而可令申候も左様達言
五月廿八日
宗景 在判
馬場治部どの
三村元親御本家親ハ三木
肇も明常永禄九年乃春ニ至りて手ニ三村家親
仕らく御ニ而伝出く而も打入る野はし吹乃へ常

まことに安からず思ひ何卒謀を以て三村を
討へしと色々行ひて清宗親以為に康信せし
頃ん備中古藤林次郎同吉三郎といへる者の
方へ行ひ神かけ誓紙を以て家頼にも能く
見る家中にも寄宿せし行ひて何程に能く頼み置き
其地の案内も能く知りたる者を以て呼置て
是等の者を呼寄せて何とぞ家頼に悟られぬ様にと
めて深く以て頼み置き様や有間も窓に教へ給ひ
み次郎等は伝へ置きにける一大事の手段を
てと相せ三村を大名にて人数も多く相せ案

ふ家にて討れし人其事毒殺事にて又て宗を
此毒殺の事にて一筆生害自害にて行ふを
寄に替て深く謀をしたりしにまことに迎をし
て討んと寄に知ひかりし毒殺に候様に替事
とふて皆ひ家を是家共ひに従ひ迎に遂けた
其に申しに伝へへしとかへて是安程仇討に是或
て既に毒殺と思ひけり三村家親程を謀り
思様なる事共とし是迄に従ひ宗左も深く常
深常に致さる伝は案内を能く知りたる深の皆
に思ひのて其身中ま謀叛して討ちん様謀りん

と然候ある二月五日の夜の事なるに月もいまだ
夜更けて世と静まりて寅頃の夜くらひに何く
ゞ本堂のあたり家鳴り出し中より縁くより金子
て停子乃御目に渥し押板を見より家人は集まりて承
訊き佛檀の前と芳様にて薬師堂に安世しと由
み作郎隠し於る星し経を読能と二つに出し其後
まて見に探んとかの停子の御の様まよし称り
以市隣子出縄を附して出ありに則読絶に用て
末角に縁の行く以くし金み夜更りの番有へ於
て毎夜とよりて寒地夜のうきありに物語辞ふ子

しみて羽衣のむかし以の中く刀鞘書人の徳息し
とて伝兵三郎兼様とて来り羽衣に停たりとても
に清女りとて其不なりけるく左に小陰とて
其出以出縄くう作し佐て三作郎に語るを三作郎
是よ来て三もとの縁に出りて佐ぞ記りたまへ
御角を承頼まして乃佛檀に占ここまこつりの御を
承まよに承ひと能称うひ承由し探す是を胸に
探出すはと宮由男は是まは能見無みて堂の境
の蔽り隠まて承古佐手古中たひ子院地市兵人形
あく辞りいまし一出ひかんとせしけに三ケ子の

随従の縁の若子一手傳置たり 営に處しかきに見
こ條よ聴しきりと以ひきんと思ひ鳥ひ土場へ
走り見あしい夜の内より随従の一手傳共々より提け
て森より山より急ひ出して車様々く傳富く鳴り
振の博子鳴り其夜大伴方に細くと陣り戸まりを
直家方に在して誘ひ高其宣言に極め人為加州く
急ひより迄て喚しよ家親殿こしを出は深にあくて今
日を傳當く打入とて皆其精ゐと信う以て宗と
行与補ゐ喚て囲み方まゐ 直家も不審しきとう文
喚くしき三村々宗持運平より傳ゝ傳前く向在

傳半く向て陽陣を走り其家臣三村孫兵衛 佐宗
ゐ辞り人宗ゐ家親乃死去ゐ隠して車辞ゝゝ於
於へ宗に入り言をにて有無り叔陽急しく後家親
乃死去ゐ擬露せず方急一を家臣浦上を緩ゐ急
くゆく此事を云ゝて其死しきり乃後其陰思得るとて
家親掠殺さ惠し車世子隱まに當まを其賞として
遠藤又次郎ゝ千石の地ゐ宗様を賜ふ 末より
多く武功ゐ累て宗田乃宗ゐ由りを見 領地も加
つりまて備中ゝ浮田河内と名乗四千五百石乃
地ゐ領し其後年乃喜三郎も同く書状作是宗も

扨ニ喜藤修理と云者扱

一説ニ云、家親ハ喜藤ニ語組ニて扱しき仙州ら
別ニ云、又佛経ニと云者ニ語りあり人家親
猶扱ニ與作ニ語まて佛種の勝頼ニ其語組
至の方と扱しハ見し人語ましし

三村五郎ニ御紀伊守の男左衛門尉の事
記て備中國相ニ云、三村紀伊守家親ハ葬り佛
事あとなし三年も過て者居ニ打寄中左衛門紀伊守ん
事ハ論しけ候ニ三村五郎ニ御ニかて云者兵ニ之

君行ハあしく宇田ニ移て宮ハ氣比ま山事ニ是使
背體ニ離て云宮方ニ是ハ事ニ宮の延嗣ー是
松めしとして左らん事ニ家の加摩中ニて七度
一日もやく果あかし左右の管宮兵多打て其
其方ニ向て左ん加あし前運兵て跡ニ付討死せ其
左右の和ニ従つるありと云二の宮紀伊守ニ云ハせ
まさ三村ニ御ニ語ニて五郎ニ御論す事ニ再一
限あまたて居左宮ニ任せて跡へ味方の云事
多く打して跡後村其色うら候喜上ヌ敵ニ勝ニ
らて勝負の跡ニて思うらし其後加詩ニ云親

重親宗親乃二男（三男なり）乃ある者おもふて為長乃上者お
おれとして一勢お送人出を名将之器おかりくし
とふ所理を一族郎等時に感り河野殿せ人原乃
なしさかや堤孫々御乃上下同意して河深主之
と是ヶ失定しける事こそ五郎を御をたすけ因
内せ且堤孫を御ふ意趣率ヶ同意して家中一統
まぬ有しても若君お守立奉り大義おなせと所説
是事おし新五郎を候ゞおかりてを萬勝ょしして
食おゑらく事とも無物助け奉り常校成力お
る身を行ふ抹を是一人を敵に向ひ萬乃勢おも

し河野して其患に食お事乃外有余おいしとて
其時我をを其一族并党五十余人討しとおもふ
其外家親に存念お籠り其余士六七拾とも同く
皆一途に河野お定めて孫備に不減之大将和
為ととふ孫修に来島乃一噂お受取し依若お
其時に記し讃岐して其子お伝し永禄九年四月
備前より河陣乃其家へ使おもて三村孫五郎を
御らん為王三村家親乃弟賢に庭向率りと云
送り上道郡へおゐて弟猪七八十余とも不足
勢お二千にかつて一手と五郎を御指と為りて福

乃濱より南手向ふ一手ハ手簾越より搦捕く押
寄候右衛門尉ハ陣て七郎左衛門宇家戸川岡長船
小原等ハ三千余人を添て三村勢ニ打向ふ守者
為勢ハ三備ニ分て一手ハ南乃勢ニ向ひ一手ハ
手簾越より来る敵ニ向ふ一手ハ遊軍となる是
ハ今度乃戦ハ宗若乃情ニ深く思ひ詰め不足帛
若戦ニ至ハ如替ニ向ふても必死乃敵ニて味方
危き事く御遊軍ニて弱ニ勝んとて折まり至后
手勝ニ備く五千余騎一手ニして思ひ切まる事
不足を弓鉄砲ニ射放ち斥と均ひして寄て打ち懸る
船ヶ備へ向ふて暫く攻合戦しヶ長船切立ら
れ二乃目ヶ備へ来候處ニ又て崩し合切詰是
も危く見へ市ニて七郎左衛門宇家横槍ニ入れて
崩候ニ付於様ニ来候三村勢不足を引も退き
三村五郎左衛門ヶ郎等三田村左衛門山縣作助兄弟
十郎右衛門横ニ取て討死其外五郎左衛門も即ち川の方
押ても退り候ニ至る討死せ右衛門討たれ又是
新手を見て敵大勢候故手勢ニ向ふ手候勢ニ
ハ戸川平右衛門馳向ふ是も同じく必死乃合戦
是を見て諸兵是非ニて戸川勢打西ナリ川へ退く其時土

同月十三日晦日より而 三村ら使者石蓮院
お橋へ寄て則ち討取与助（次郎四郎名字 / 以て三郎と云）方へ
向ひて先ニおいて敵一人切討候 備前名と
浅加宗せて宮内ら信て味方も多く吉川ら
備も川知と見え申候 宮掛りして以乃儀お
候ひて追て取り味方一人討と候其上手負て
猿子討てへく見え申候敵お宮掛り其味方乃
手負お助申候川追て其内味方乃備打て取て
備し其て切捨敵数多打捕って退しと以く
其も少備敵候 終子味方乃大将ヽ踏申付て

三村警固衆く討死して其外乃儀さりとても西ら備
おそれ候七十余人舎弟惣十郎討し名高き義士
相し申候其内も少庄藤内高月七郎次郎兵
清原之内候氏名数其四十七人討死し手負百余
人ニ及ひ候尾張ニ河本助を直家より感状
おおし申候

去ル十日備中ニ及戦於藻原敵一人ニ討伏
則川辺於浅味ニ筆令注進候見候ニ返田
舎ニ於必ニ其聞之御使申候

五月十五日

直家 在判

宇喜多と毛利家和睦の事

了姉事聞之

宇喜多直家は孫九郎と云ひ毛利元就にも疎く晴
久しく敵して伯州庵寒城を攻落させ花房
助之進職に備前江見修理を討て帰りし城
を備中にては白鷺八郎左衛門毛利勢の国を責
て籠城しけるに浦上へ援兵を乞ひ直家花房
助之進を差添へ深く守りしかば毛利勢籠城
しける勢を追返し多勢を討洩し天神山の

浦上宗景より毛利輝元へ使を立て直家が居宅
喜多直家逆威を振ひ只我を誅罰せんと将に援
兵を狂又中にも申しけれ備中の三村家よりも父
の家親を宇喜多子討れし讐を報せんと存ける
まで此勢をかりて敵を敵せんとて備前
を押立させうへ出すも多くしと云ひやり者ば
この事共を毛利家伝へて尽く毛利家と申し送りして
毛利の敵となりまでは叶ひと思ひ小早
川隆景と備中へ人を遣はし備前をさして安芸
与かりて深く頼み浦上三村が手を扶て毛利勢東へ

語りけり備前国においても名を得し
三村紀伊守元親は老臣にして吉川元春小早川隆景に
まかりしにあらしを宇喜多直家乃備前にて謀略して
元親を害せしかは元就も宇喜多直家に
由なけれは備前国味方に付て御人を頼りそれ
宇喜多と和睦して毛利家へしらせて荒木にて角
南北の事は備中松山城三村方へ毛利家を押し
乃為に宇喜多と為成従はりて参候

備前岡村明城落城之事

三村家親弟元親後二男同修理亮元親三男孫
次郎重親家親乃弟同宮内少輔事と深く備中乃
城々に兵を親に備前にて上宮山城主元より
鄉松山城を請取本城として中島大炊助
味方として宇喜多勢を降参者毛利家と宮
為に備中人数をもつて事もありけるに三村元
備中四十ヵ所の城々を大軍を以て備前へ御
宇喜多直家と和睦し親乃仇を報せんとて毛利
家へも宇喜多家に対して備前乃城
乃為に元親大将乃軍を遣し備前岡村乃明城乃

山に捕が来て甚堪かね斗けるに備中より気物が
しありて少将宗任りて明経当の捕く放承気
将常係捕中よりも気物おして坊個角ふて捕
重助山の葉にかりて捕く其中に古廉行りて重
助前越係りて南の岸お渦巻し捕ふ衣に放濩子
て突きき重助刺けら拝捕ゆに放濩お突刎し行
けり留る重助郎お刀物拝て切伏せり之衣く放よ
来て重助子おてうし係皆共も付衣宝首二つ提
て捕子のて其日の逃宿き果子おり明る承接十
年青山の鋭く備中堺お依て凡有然しく庭明経

者の捕く庭付お行け法田村の往き行て捕く将大
捕中もふ定子付あて去りに国章を右に出の若子
松明も打てを備中堺おしより将の者ゑを当接
も争去話明も有薫文字隔きの物て遂し
一つ未平に承み色る堺辺の明ゑを捕其せん力
為く南の山細に中川くおて衡く係の捕く川に
有係付し去に再出十人に及者係至的へを備
中堺の堺り松岩共七郎宗所を係七郎に松当之
十余人お係て明経をり捕お去し世を係
松すに法田村明経を山の涌お之世に従せ

乃地に皆明なる山と云て其下の御鉢形を為
村に皆有る古跡有りて渓を為たり宮家
清泉に明神ありて御本の池一声行ふ久
明中に祠せる深山に明神なるを備前國津田
村に在るを云ふ則古代の廣せし所なり
山なるべし

明神は大段備中國深山の中―
宮内の古より備中に属せし地なれば吉備津之
らして田をせしに村に寄山に建て重兵衛郎中島

[library seal]

乃中島大鏡に備中乃味方なる吉備津乃本家
を迎へ坂田に宮内なる田通しける大船山乃渡
し本宮を同じく―古と明神山乃根見染に
をも通しく吉山中島大山をも皆味
在ら来しかり吉備中に於て姫神の生涯
新に渡りき吉備津を不為地成り於かく奇お
而して吉備本所―と云ひやり古来を根本葉
所る評議して西山寄山中乃味方渡りて来とふ
を真家乃修為す―し其上根本葉所なりて書
子為備中子霊堂を宮内なる子通り子事為ら所

覚つかしき事にも此城を敵勢にとられなは直家大事と
て攻んハ備前の内にも新しく備中の中に
告けて援兵を請へしとて宇喜多か家中に急
ひ備へき手切の返答として其節直家早く作る走
なし明禅寺の城を攻取備中勢を援けんとて急かし
きあらき難所峠を越へりありて計んと利ける
つし事の事と工夫ありて金光与次郎へ直家より
狼て返る明禅寺の城を落す成るに三村修理殿へ
しき行たる直家の一戦して三村勢を備へ返しき
如此備中勢備後へき様子諸勢を望しとそや

また金光館掌して石川左衛門の智（三村元親の婦夫也）
へ使者を以て云やりけれは重て直家に降して
明禅寺の城を攻取へき様子なり城中へ降候
りて城中と謀し合て内通いたして中備利謀へる
つゝりし此事三村家へ聞えし急さ候へしと取ひ
やりけれは不遅勝負へ往来ありて明禅寺乃根
手前城を攻りも宇喜多にて云ひや備中国の兵
勢三村一族打連れて直家を不意に攻むへき
故直家明禅寺乃城を取りしか幸ひ打ちて兵乃
者共を不意に攻起き大軍を以て狼狽の一挙

に尼家に訴え兵勢を以て浦上をも討亡し備前に
勝手に勤以て妹子を浦上の宗家に處へく御き當手に
立之を加勢の宗当も無し終に備前表の体に急
くへしと備中にて三村無勢加り侍し事故無
志放ち三村修理亮元親石川左衛門尉庄為資杉本
ら従る見妻在京都に擁ち従当一手勢合せて一万
余騎の兵引加えて旗を備前へ発向を寄兵多
尼家を今日沼城に打立て西方量人に率ゐし
備へ加備を古庸の山端り備へ忠勢を日笠村迄
とらぬ打より尼家の先手に進みて明禅寺に備く

押寄せ先一備して暫く息を継ける所へ自備前
勢備り浦浦の備中勢三手に分ちて押向ふ一
手は富山の麓の宇子に付て押出し一手は前より
其保経を通り中道く来り又一手は山に付て津
島両村へ通り諸乃備へ向ふ所と見へけれと先
係尼家是を見て前としく境の続を志し寄り
打乗再拝振て明禅寺に乗入むとす三村か
虜となるべし又宇喜多が城に攻居り来て追しして
備中勢を切崩さん事を竈の上の塵を拂ふか如し
事攻落せ若さとて田宮の牛加一々宇子乗切て

明禅寺山の城を升て大将如くのことく高見を
法螺貝吹して摂津守を城中寄合に揚て備中
勢も高手の陣は早急に城に寄来て播手出る
於ち高手切て会を根来も宇喜多も少々で家
の山伊賀は難井山に川辺川端其後さもに取残
兵は打て手近追に追掛し打取十明禅寺
少残続かけきを備前の備中勢退て城中の出の
手が見えて当て勝し兵て当家より三十は左右も
おびしく揚てきこんて宇喜多も明禅寺十余町に
備前勢を打ちなし当家の城に攻落し少残続揚

にて其山より陣取に備えて静りかへりて有侍
手前如くて備中勢備前高く打入辛川春にて手配
し此時庄元祐七千余人重光三村源左衛門宗高放葉
自身として富山の峯の麓辛前に斜に押て寿社の
当寄る川瀬に向て難井山より側て明禅寺山の峰
へ向かひけるに中の手を石川左衛門尉久智三千
余人三千福村の中道より富山の城の出城を
助海り京極村へ押出陣して明禅寺の城に於る
大家の播磨守切て向ひけるを大将三村元親を
中備大将として八千余人陣の後に

越て阿曽追村より此の如く候て四郎秋村に揃て
東條越て後城へ押寄て野伏に責寄られんと評定
楠正成吉日の実と共の川内越て三輪山辺さし
て備ふる所も明様にの城に楠の嶺表に来
子の逢て是にに以てにて五社も多く宮方多ゆ
楠正成石川兵衛東右衛門大家来陪候て備へに
合日揚くし　湯浅氏が持以て三輪山の立寄
湯浅が揚へて寄てうしろを備中郡司の所へ
城に乗てう此後其心の御老中へ宮方多瑞を
信実せし勝山りて上洛子寄りて寄掛るを庄之

秋の備に勢て若左川辺に正成再拝に相振まさ
其あし若狭宮に立て湯日の阿摩辺へうつしと
楠に身をもろともしてつかさ性大性子川にて打
不諾此を謝して計らう若狭が引けまさに其とも
正成も家臣が実業と二人語りて五十人斗り備
ていうしろ居りせん方なし是を寄り討死せん
と延引に佐り備へ計てうしろの方に数多して勢く
き延引所にう退散なく二條に従ひ宮将
四大家様子寄て如く勝来の四半り兄の実に
書うる方なりを正成覚書にて是の夫家の一旗

とりへ参り近江守やゐてと太郎に申りて宮に
奉行と跡に深田をみ一人も隠させ討取と下さ
去年を元祿に無三子宝人櫓が出て討し本府之
秋も手が負ひ本所が家臣聊存て川をうんとを
所存を太郎とりへ本月を静勢修理頼りに近て
機嫌寺の東一町斗りゐて元祿が討取本府寺ね
討取去年を皆参りの手無紛案に思ありに今府
憑機嫌が元祿年格使中にて討取らる以へとも
思をほ隠りあり又的に気ゐて使中乃無士討取賜
しきわざ秋が宮が掃捏に採が策しといふ今を
探を有し玉宴役の門内に今太秘行り則採乃者
りしまへしと　中の子の石川左衛門尉左次をまた家乃

所様寺の博が昨る語が消んと京屋為乃西まて
近江守去年をも手博を原して思て出乃手抑りを
去を業子が遣して見使へが宮に謡留抑へ宴る
存子下く急り本府元祿に勝も出為と名へて川
追年を石川左衛門尉か切れて牛為か咲と以ふ尭
知乃士か咲んて宴て乃陳ちひに遣ひ去年を座
今にまつり古家乃使へくりりて跡にても稿村作
所へりしをとの手乃元親乃使と一存に知りて
東一家と一跡か為さんを以うまと以去年を如業苦
て信ず尅らを系乃直系外を絶乃追任に以ふし

川におりて近き西の岸に備へをなして東条川に
陣して掛らんとするに楠が兵討て出んと打出ける
に三郎正之和田源秀を陣に進ましけるを見て合せんとせし
かかりしといふ石川の若党ども打つて寄せて
従ひ深入して宗徒の侍ども若干深田にて三郎
元康 楠子孫の時分に三郎正家の首へし深田 氏の別名正三郎と此深田一へし
河内勢馬を廻ら房の卿を擁し三手に備へて石川に備へ
とくとふみかつる所石川合戦の事に於て退しけて
東条の上中道へ備へて待ち深田治部の陣に
よりて討て盛りに鞍の河内勢房を扶持より静かに

備へ出来て鞍ひかへうけて南方より深田に向つて
宮に入して石川地侍頭を申し中島の城をおし
て多く討死して石川も危ふくみえし所へ寄手伊勢
我が左衛門石川の端にて竹田村の東へ引きかへさせ
て後陣を集めて備へ今度深田勢を退治せしめ八
幡の辺に陣して追討の石川を渡し備へ出来せし深田
勢の砦に退き宇佐見川を渡して鞍ひきたる深田勢
又討たれし者も多く残りも危うく見へし所へ出陣し
小所村の川近く石川勢も若乃総軍の陣を受る
陣ても退きては川に陣を張り其の寺の西方村三村へ

理元尊氏卿ハ直義乃討手乃向ひ可越者中将松
田金川より亦ヲて乃所事とゆらんとに佐木
出雲か上テ押の方ニ亦山ニ陣し中山乃中条大
將か菊田を始として土肥遠江乃那須田備乃
守兵衛乃尉等ハ切の了場か参らんと進行
ハ源ハ四郎時村乃迎か是亦時明猛き乃博乃也
乃兵庫ハ々是を承陣せしと見為取り尊氏乃
二手も退し幼軍せしと見ゑ尊氏卿乃傍へ
越後守を率て高山ハ陣所ゟ川越汰岸に方
こゝを取て小川多くて足場悪し是を隔て

川元り人馬溝川ニ塞丈者多くて緑礼翁か脇さ
是ニも尊氏乃旗本を備ハ頼ミ是も後陣の弱らし
か乃為ニら残へ是越え是南へ向て備か進ミ脇
様き乃手より中尾山ニ直家乃備へ一しか見ゑ切け営
と一戦せんと押向ふ直家乃尊氏乃勢り来るか
見て備か山より引しこ乃国村く備て昭君高澤
金剛助か若備として待多ケし市く尊氏を尊氏乃
警乃事か是を溝かも晴かも勝ちし其一文字と
切り早来り昭君宮こ備へ奈も打し手に切てこ
ゆりこと群山ニ昭君も宮も切ちしまって山崩之三村

云ふ廿八日返給て平家の陣へ切かゝる
又と平家方の兵富村より備中勢の下の
手は切勝平家方は戸川を手宇田近来川にて陣陣す
板倉原の平家の先手切かゝるに兄て陣々と
備中をも云親の陣所へ横合よりけて見る陣に
陣ひは時府も寄せ来て返して路ひ平家の陣中
も乃多く去りてこもりし三村の陣中に付かかる
親族但して多勢軍法元親出て合を行なすつき
時なりと馬を川返て進む不か家人馬の後にて
手て西子川向川追懸を打合ふみ勢成宗とあり

て竹田村の北と川にて打宇兵多勢追討して三村
の勢か打入事料かゝり追さまにも平家自兵
追か制し軍を入ると兄て川を渡り三村も石川
も陣の備しかば敵へ掛く備中へ川を渡り原より日備
中勢ハ中下三ヶ所の手をもて戦ひせし兵士皆
かまて追手時附して馬か東将十の時の時将
飯と川の所て云ふ備前の方若殺平家の世は
一乃勝軍なり

重光法の本中島寺云多く降来之事

今度平家備中乃大軍ニ打勝三村等後軍ありけ
三之丞ニ而因幡せし備中ニ油ー西備前乃城ミを
也皆し従乃城へ篭りけ居之家山乃城ミ金光
与次郎ヶ籠る所乃城へ出作して平家乃旗本よ
房ー之ヲ富山乃城お一ヶ倍やうし忽再山ノ城ヲ
渡ヲ本堂高之帰る四郎ニ御お以て平家へ安芸
乃陰村乃赤浜お渡て所味方ニ三倉とりと申所
在家並お出申高ニ而味方へ因幡せし老あさ之
安芸備中堺乃返りに追討して首乃一四まても
於金者へこう小元親ら申あお渡て早川乃押おして

今度浮金長妻乃士あり、さまよも浮人お数ミも
也く之ニて戸川平右衛門ニ申ありして渡ヲ本之
子ニ所地お取りあやら之ニ高之隠居ニせ別登し
て打連て浜ヲ草所お出へ四郎ニ御之平家ニ仕
て不知りー騎川て再山部乃本城も程動ニせう
三ヶ所中島乃中島大将之三村ら来様へ向ふよ
草田之元年之ニも紛策乃浜川猶りて不川ら搭
乃返へ出返討して首一り打取渡へ於金しして
浮金之如ケニ大将ら一旗備中ニ出し中島郡
乃手門とまニ小老大将ら平家へ浮之備中堺境追

附せり其お悪人にて中条を押領して中条乃城乃
四千様乃太平行りし其交際なる所を攻陥て
太郎か謂まり城陥お侍共て兵隊行心なく城と
兵残切殺して偽年に城を取りて新左衛門なと
藤子み太郎といふ其切数す是し太郎か子孫なる
郎といふて其家乃臣となる今にて其子孫中条村
ニ住して其所に新左衛門か領せし様乃ありしも
今に残せり

一説に中条乃中条太郎附せし者是しより
天保四年迄乃凡山岸城ノ時初田乃城おと

中条乃城あとも字ある者より渡辺某か所城を
太郎城お居て様乃ありし渡辺ト陰居なりしか
さりし後して討ともいふ又偽年乃中条
新左衛門様ト太郎といひしも内名あり其
是其本乃家来二階堂にて一族にて其あり
といふ其比御代乃中条太郎偽年国乃中条
太郎ト能登国高梨館迄か居乃中条左馬介か
子に中条太郎とて西国に同名三人ありて
給ふ事なりといふ

一 宇喜多備中国に御出の事

直家は三村元親と和睦して婿を利家に嫁かせ
て睦みけるに属を尽しといひや、然るに三村は荷担
の三好家に懸む出来つて、毛利家と手切に
およひて、毛利家より三村に討手し、直家
にも備中へ発向せよとの返答ありて、直家云ひは
頼ひ備中表に出勢すへしとて備に出
陣於ては永禄十年五月に梶川の城内へ押入の城に於て
一 とて戸川平右衛門一手に以て攻落し小
城あまたも地形堅固にて当手を川にて陥落り

て当手庭瀬城行りて細城行りけり落城地に至
き押の分に至て三城の城戸を破りて攻落せ井掛に
組行事隙輪に旗と行事に昭日に至る元定ましと云
而して直家出発行りて幸房御出陣に依としして
戸川を先として川よりの事なりとまゝとも不攻落
まへく見へし城中より御出陣あらく定まりとの
明使ありと云ふ備へて御出陣一番に出世戸川も
皆傍ひて城へ入り城中より出て悪く退城ひ出に至
て城の備へ掛ひて是よりあり兵国松八月中旬備中
あく直家御出陣城に攻落せよとの制として清田

七郎を討ちに出向し 其身も大将門佐東銀山
の所の郷保角某人数九千余騎にて武力を武田
城を攻め下総守秀長熊谷城守香田[illegible]三村元
親等加わりて防戦しけれとも其身も以外の負軍にて
降りに[illegible]其[illegible]吉田[illegible]城に[illegible]て皆己る
兵城に入りて楯籠り 終に落城し
武田の城に攻寄せ 城之下総守防き兼て降人
となり城主も討れ下総守子[illegible]多[illegible]にかへて
[illegible]也 元就に降り御[illegible]民[illegible]
て[illegible]家の[illegible]属[illegible]

一 備中庄式部少輔之[illegible]以て[illegible]
の猿懸の城 備中国[illegible]村[illegible]て討
死せし事 舊記有り

尼子晴久 尼子経久事
尼子は永禄九年雲州富田月山の城落て尼子家亡
臣共数多ありけるに 此内尼子家老山中鹿之介
て尼子家再興の事に謀て尼子孫四郎勝久を大
将として吉田三郎左衛門と云者を中国へ出し
味方を催し備前伯耆両国へ到りて尼子家に与み

ありし居る子一味作りて西か奥より可也
備中一国を切従へして宇喜多子領せんといふ
山中幸盛らか将か於して子細か諸説ー事定き
其家臣か出たる家臣等謀して即一味の返答に及
ひて有利家に背た申きしも此時義か同ひ有利
家子数多原兵をかせて帰りし明る永禄十一年
備前宗景等か出て有利家へ使か来て宇喜多出
家居て旧臣山中鹿之介を従へして虎ー次表裡の
其家等か謀しかりて此を先にせんと先かりて
宗景有利を打勝し其家然軍本意遂し得り

其後

宇喜多松田か討金川居城を攻

備前金川乃城主松田左衛門督元輝は永禄五年
子浦上宗景と和睦し其家乃聟となりて宇喜多
とも親しくありけるに其家臣伊賀か伺ひ松田か
計へと思ひ本願寺松田は蓮宗か志以信仰
して家臣内の者に法華宗に改宗させ従はざ
る者をも強ひて改宗せしめ金山観音寺の僧侶らを放火せしめし時あり
乃金川城中にも日蓮宗の道場を建立し本末生

家中の者共も領内の百姓も皆々将監か守と
み追出すへき手分し真家是か幸ひの時なりと謀
て討んと思へとも老臣小楼井土佐楼本某守惟
市郎左衛門其弟与右衛門なとゆゝ能者ありて家
を主張帯役一致し此楼井土佐之医術を能
して以来を陳ふる之席も別手急せ為様を云編し
市将其上西真仁堂の生月まて数と以人を七条
加あへ療治し市隠み宇惟家来も謀なと能せし
老あらし真家か所作より金川を至りて庸将を
不得して博とする将を付市表下の時庸を掛と

て隠して宇惟無右衛門を討殺隠謀しけるも有す
事にて真家の臣子掃せし事あり又は其後定か市
郎左衛門も追出して松田へ家治に任せ勝北市為か
幸と天正十七年七月真家より清ゟ虎康乃博を
伊賀右衛門に経（是も真家の臣なり）同要源郎（野田撫狐の臣なり）
か振ひて兵を為を松田左近将監か出まちに心行隠
と申如くして討果さんとしけると兄より外に謀ニ
と行き出て左沢を請とも皆松田か守をみ伊賀之
日もまた知れりし故伊賀兼て此義松田か討
かん事いとり易うる由し申合半の付とする

而猶ほ急ぎ本家に帰りて偕に其縁にも伊賀
守をもよく弁へたる者にて定めて伊賀守を虎口へ向
り寄候相七月五日御本丸の門限にて玄家の詰
計の人数にて赤坂惣兵衛村子を以て守り修理伊賀
を率ひて出で御門前内入せし事あるを本丸の庭
金川堀内道林寺ならびに人数にて出でて大関乃声に
物等同じ所に於て候勢を堀外に於て防ぎ居り
家老横井与七郎に居る也手能く門にて防ぎ
伊賀守之を防ぎ候物掛て本丸を防ぎ左近将監を
討取て急ぎ駆付搦手よりも堀へ入る横井

共に人数を出して是を追ひ乃て其を事と云ふ隠施
ちて是を防ぐ左近将監櫓より手引て伊賀守へ向て
行乃故を以て多くの堀を防ぎやと熱く其党
難義に及び伊賀守の家士於て幸ひ出て是を捨
左衛門に討取り息孫次郎是を以て引取りて士
共を乃引して防戦せし村松修理も伊賀守か家の大
事にして進て討取る本家の家来に堀外に入
伊賀守と一所に居せて本堀の四面を一手に
手伝ひ六日一日是を防ぐとも紫田乃堀を守る
宮崎其家来能くて居に入る節堀ならでも付

殊之外為しきまことも前年之當勢に明りて見
に攻城之本城并に無之迚も皆澁く七日明暁
孫四郎并治男左衛門儀に城に居けるか杉村某と云
者に逢て使番出入へ者近く大将家来も士卒も
多く房様希深伴若文字岸か見て者にりて定に
去りて二の城門に攻破る本城へ切め事を残り
少りし松田か篠の郎党陣討取りて城共落ゆ
けり松田久兵衛之家人共に逃来て西の方に出陣
ひまに下田村三房様しも麓邊乃城より伊名に加
川かも前事来し孫四郎か自手當前て切て切し

家臣之逢ま事形と見へ當陣友右切免り孫四郎
之左衛門討死せりけり孫四郎左衛門無之號云云
に組まて激しく使番へ房様芸類

宗景勢与直家勢と片上出合戦之事

之年永禄十一年より宗景之勢到家に属し宗景
當之浦上両家乃党力せしか之天神山と浦上之
御身有に成り入数に剋し宗擲に掛て迫合事
度々有り元年永禄十二年の春天神山より伊部
に陣取築て日笠之に至て也しを所より出房

助を攻めとして攻させて後に攻落し城主日
笠が討死して宇喜多より今が加勢してせし
又片山の戸田松の城に天神山より浦上河内景
行が重臣を伊賀の城と攻ぬ近藤何がし
等城主助が伊賀に来り居し時戸田松の兵と当
城より近藤何かして重助三が薩摩四五十ばかり
追て当坂の下の辺にて追つ追まつ五六度も返
合て川の辺にて敵高治が墓所重助書縁が追撃
しして薩摩逆大国にて薩摩が治まりて伊賀の
城へ川の辺にて

宇喜多直家備中新田城攻落之事

宇喜多直家卿が旁し居た家ハ皆力しも毛利家に
背きける事がまつみて永禄十二年四月毛利元
就の元清一万余の勢が出して備中に出陣
し宇喜多方の城が攻んとす三村修理亮元親同
実上田実親兄弟を毛利家の先手にハ
りて佐植木下総守秀長の親の居る新田の城へ
来りけて是が攻植木藤右衛門福井孫左衛門
宇喜多よりの加勢の人数等も楯く守りて

防戦を為す坂本城の地に在りを寄て城を攻めて
兵に炭を出し多くして備中を攻落させしとて其后
に有りしして猶に出て落城せしして四国に至く国
に城中糧尽しけるに至る長宗我部城に引きて城を
寄手籠城の一門に於かし備前を出し其家へ加勢
に乞ひ其家中に呼出城に於て帰参して其時に居し
其後法印に城志を乞ひ静みなく思ひ坂本を立
其事何卒吹子を遂人数に加し城法を一々と返答
して籠城を返し付し兵に其其勢を出し川を
して旧城に於て秋田の地を一里計り東に陣取

て城の囲みし毛利家の勢へ人数を向けて防く
城中たりより中より出て切ておし返しより陸を防ぐ
きましても毛利の軍にもかゝはらとして来りし然る
信長様之陣に至てより勢路の押へて備へに向ふ
其為陣の旗子々に分けて防ぎ守る其勢百ヶ所
余人陣所を去り常生無家にして弥陣し帰しく
傍へて城へよりて城中糧食して其上を行と仕候
難に及まんと陣に引して其上も籠叶ひして
日に建立陣所に石川備前(?)二条家守其旗子他加
り其上を具す中に於て兵を先手としてみ防く

花房助兵衛・福田安四郎一番ニ陸ニ居て
乃記攻鉄小堤中より出て喧二三日乃程者
て合戦しても退も死ん命いさ討ても討死せん。
と門を開き出て小牧勢以攻鉄小合戦陸陸
乃陣を守し陣営も必死ニ成りて鉄砲を直家前
包つ以て見へ本陣下ニ直家乃旗下を立つて言
おいて吉ともと申ちりしりて安左衛門是を直刻
陣中乃隙者陣を打り追て此三村元親上田重親
返し合て鉄砲しかく元親を陣負て家人乃肩ニ
助られて川追く重親を逆ニ討死し宇喜多乃

兵ニ首を取りし其乃陣右将元清も漸ゆり返せし
とかく刻しり直家後軍乃陣を見ニ来けまさ出て
来て返し其陣一手二三百人集り直家一之郎備を
押立て折節直家も本家も見ニ来て合戦ニ至と多
勝鬨を揚て兵ニ引揚直家其日宇喜多方へ
討取首数六百余於某級とも直家是を陣しも直家其家も
味方乃備へ兵を出して兵士討取て備
前く備侍衛を直利元清も是を以て入りより直
子
右出別状
永禄十一年八月中旬宇喜多直家備中要害

切従へんとて舎弟七郎左衛忠家を始とし
て其手勢中ゟ従来新左衛門時右衛門ゟ
本郷山寄九千七百余騎を指出し不残備中
へ攻入る所存ゟ廿五騎来三村房くゟ余所及
とりくらもまた勢溜よして新見園荘各兼護
して南利之輩へ注進し援兵を乞ゟ共ても
南利殊ま九州勢向乃時荘ゟ其を援兵近川
こ及ひ本陣攻手足兵なくして皆其家を
宗房ト壊ゟ打りて妻子眷族ト共ゟゟんせ
去ま残り毛利輩を云落表を開陣せてのち

本陣味方ゟ背地し去る者を悉く退治せんと
て是年新田城攻入りし
日西園を手にに見ゟ
新田城陣後の時係子来りし宗本兵一を鄧
末も子卿衆し是韓を陣後住しを西乃方十
丁向ゟりくゟ居去富山へ総縦二不等へ
し若陣後なくを不等へしとりかて備前
へ来り去家へ陣後乃事ゟ訴ふ其を去家
美川にりて郡勢乃衆ゟ其を兵一を鄧兵き
勢ゟり去富山へ粮糧ゟ立て陣中より皆ゟ

見るに縄一本あり常色を添へゆきまって
兵衛尉隔所源為中常なるを無一に懸心を
劉二を添ふるも乱暴の也り如きまでを縄に
見あへく男子二節並へて猛くしく主の常なり
添はれて高ろくしけ葉の如く添は二本
なり常色を捕へ中将し放ひ行入りとなし
みなき備中路に渡りし躍ひ行きしに一日
終日躍ひはしが常色を味方無く川に物常に
時源為に人叢ひ来る味方播磨の中に陣を
おおきて川辺く走る路にて源為が待源為も止

て不返み川を葉ひ来る程に源為走り寄る
従犯にて掠源為を掠捕まなりて寄て二重太
が突伏せて首が家臣血流して陣の手柄
とする事も事を世に其が為みて劍の一押
入捕手く川辺しなり
又上田重親備中と宮記塚遺跡西国を手記
其こと徳田重親子細按　又三重親が詳知し
を根本の家臣根来徳大蔵年て前を摘しと
西国を手記に行別

鹿子城と毛利城と仙石家鍔ゟ寺多山城

之事

却て鹿子城久々に永禄十二年乃夜より宮仰尊乃味
方に集め候由にも相同り相集め刀出やう
て仙州へも此件なり つき候し 時の事共を以て
鹿子方ありし其仙台乃三浦牧出来市芦田ホ兵
記し了因乃城に攻破り毛利家より人数差添康川
吉信堰上喜多郎山名持手年に詰取て一手治し
人数城差けるに又毛利家乃杉原播磨守に攻落
して去年末亀井之國衆に於て勤て出しせけ

同じ年布倉鹿子城久敷出人修り入りし事に依て
三国其中に於て又候因乃城に攻め候て毛利家
よりも加勢として吉川駿河門元長嫡子少輔
五郎廣景保田与一郎少輔吉継西下集於て因乃
城を入り手を候三国芦田五郎牧掌罷り入て退し
小勝手にて早攻え如くし果して備前の宇田川へ加
勢中に在付候別も女子に大城門寄別合作来親王
御内に四千余騎加候て持出重三国牧五年常次
備前勢加奈世て早々攻来是とも城に大勢手て
防戦手輝き藤田城様なし而る手城中ホ能仙館

源七郎佐伯七郎次郎とて元座乃居ニ遣て覚
知州ニ潜ひ内通して然呼を受粮道を断ニ掛て
捕ニ出て当年ハ州ニ献佐伯を隠謀ニ尋ねて
難き見迎州ニ隠陰とも捕半ニ行ニ亦見を甚虚
に示して亥年戦争一子案除十月六日宇田乃上
仍ニ押寄放火を捕よりも出て防戦を捕え乃
乃兵衛理村間源衛門秀川宗右衛門ニと云者
知訪て川辺布親其夜亥年牧岸田喜傳兵衛乃
州嶋七兵衛等を捕ニ攻める手従を書ニ州ニ発也
川を明ニハ伏兵を討れ以嶋節ニ以て餓死として

然ニ川越して討くしと謀し寄せ明之を六月六日
傳兵衛三千余人ニ久慶と川を取て三千ほ化り
て三十兵を傳兵衛として甚久慶山ニ尋乃旗を
寄せ亥年除地堀家牧勢と撤退兵を餓死と
言ひて捕りに押寄せ捕半より出寄りを
傳兵衛ニ至て御き出て当年ニ討死んと平尾七郎
知衛門是七十余撤退川市右衛門門田源四郎
秀川右衛門同村人芥川次郎村清兵衛元年案除
是に三年ニ出見て捕りに傳兵衛等は行としては
当年ニ申す人は族は是ニ出て亥年牧寄一子傳兵衛

手負者申く渡部に掛くて打かけ候ひて渡に入
寄て勢色を牛尾忠兵衛思ひ切なく不意に討せ
伊兵小塚みて之行つ忠兵もなく打合けて川追
く玉串数勝寺に参して追手ミ塚兵衛て備へし
兵衛切て出て玉串数と戦ふ兼て堅一事なをを
玉串数打負て弱くと引て引勢を利に取寄と
進うけて不意か様を以打越寺部所時分よ
しと山乃上より打寄乃旗打かせを先勢伊家
乃伊兵三手に分以て韓打打開打仰て切て出し
是を三田塚兵一名も世兵衛を伊兵乃入数を合

し掛りて追て是を討香川右衛門維雄如くて川
ありし不残討ありけり一し戦ありて討死せん事
険ニ皆川ありと打出して有て直し切居て討死
吉門田原四郎継久溝越右衛も是に続ひて戦て
討取し其外勝去く打に討為さまて捕へ川ありか
勝時ように寄手捕く仕かゝりて元ありへく見えく
して手捕子残り無し香川左衛門光景か子広
景は男兵部少輔春継宗像三郎左衛門原田五右
衛門吉川七郎村上新左衛門塚原中左衛門ありし
三郎五郎以下討死ありて是を討く小塔

ありしを備前勢川邊にて皆お討方原々大半討れ残
原者ハ叢なる柵の中へ刀け原お走柵木お打越
斗月能て討て廻りける梅村と云梅五四郎討死
て有し香川弥五郎嫡宗像三郎左衛門と二人斗
りこ姉ヶ原々志るん息お継人と蘆の一村杭
立方原出けて伏しハ方原備前勢も跡ハ中まて
折者原下へ玉串隠岐班来り一ヶ斗りの浅お提
方郎等二人従ひて寄て剱をも一村蘆の陰より
香川弥五郎嫡継と名乗て寄て討て東を玉串
隠岐服部を名乗寄て漆か寄せ漕く跡ハ方原々

玉串々首摺おうけて細腰お涯かて寄せ込々を玉
串少膝か折て倒る々所お香川押へて頸お取為
隠岐々部等二人を宗像三郎左衛門寄伏せ各一
人猿渡を汲ち捨る共て寄伏せ頸お取て摘子
の子方剣み将監が遂々手へを香川従いの自ら
迄一寄て跡ハ香川弥五郎ハ摘と妻子摘子川のけ
子玉串隠岐々弥五郎嫡も大将討取けるを取記し
将も備前勢乃も丹寫原中も勢川辺て其日内定
を果子けり於時玉串と香川と濱か寄せ出る所ハ
お一町四方陣も左返して香川々浜城とて

今ハ猶其院の跡も侍る賢王寺石動内寄東内
富川平大御門常化別ニ在陣して城ヲ攻落近
失山ノ時討死明ナル元亀元年備中へ右家ニ備行る
異本ノ人数ハ川辺ニて花房助右衛門之ニ在城候
て猿山の城ニ籠リ毛利輝元へ拝人申候
此時右家より富川国平長子と書キ候三人
へ達名ノ下ノ時戸川家ニ今も伝へて有之
其ち岡本氏と名ハ一字家時ニ出来
後藤ニ申伝へし書付

出雲国於此刻平備中御在番毛利輝元御前へ参り
出雲へ引取り松山三郎左衛門帰平二子条陣ニ在
し出陣し彼ヲ始より右家ニ攻ミ来りて至
亦本も元亀元年正月中旬備中ニ出陣右家を討
上帰平と一所ニ於て取敷出し高山の城ヲ取
国へ攻入り此前ニ城を石川以東其時ニて
石田其外達方も皆陣取り居候の陣人乃上下ニ
陣として皆敵の城ヲ攻ルニ皆敵及ぶところニ
其乃時ニ於終て一手ニ二人三人討取りまいらせ
城も取ニ候ニ右家其外ハ帰て其ち山の

城が無からんも計りがたし然れとも人数おもむきて
寄るも却て防禦しかたし一郷城しけれとも終に
まりぬ彼古くして其とも隆景古主を本城の大将格
何ぞ我籠りし全毛利両中の子其何か計し隆人の
人質とも取て本家も於上総守も開陳を相松山
の城主庄高資其子息を備同せしも相勇卜総
高資滅しが笑高横井六郎が御門営属之属
して三千五百余騎毛利方野殿の細川が始
の二三十年の城が攻落し其より竹の庄が攻ん
とせ然共も藤利へ注進也其元清八年

兼勝が兵として備中国を討伐三村元親が先陣と
して先つ松山城の庄高資が一時攻に攻落し男女
百余人を切捨て毛利方尚数子隆景等先に一て
攻んとせしを擬しつつ毛利隆景等先陣し松本庄を
数度寄を刑く落城に及ぶ中子毎田城の松本資富并
城攻ありて大方備前にも云付て討果し元清猿掛城
に来て備中を治めて毛利家に属しける

宇喜多直光与次郎宗高が事

備前邑久郡富山城主直光与次郎宗高は直家の麾

かゝる事なれは既に忠家を殺さんとせし所に
重光か家来を捨置とハいへとも其首を並て
忠家殺されしに信乃城りも有之哉几を忍ふ
とは思ふまゝに不残落葉行して重光殺害し忠
家常に思ひても有る事に思ひ込み悠久の事信乃忠
家を殺し難くて味方に属しといへとも因ならぬ
報心に懐く故に信友か忠家に恩有る故に悪んて
羅なき殺害をも其信捨置なき行に及ひなんとて
元亀元年乃夏宗高に城へ帰て切腹に及ひ
しかは宗高其の跡を継といへとも夏に忠家諫言

なく相宗高京都に参て忠家の為に死後を信
まで不題にあらさりしを行へきを城に至て儀になく仰を
へしと云々語るへし有りと行り其米宗信へ友
郡く書状を以て自害切腹之事の宇佐山の城主
云に富川平左衛門と云ふ者ありしに富川を呼
出して重光か家人君子に富川をに富川に任せ六十人
斗りかり其蹈静郡し様に敵地に近き所に其を置
付と云 馬場重介といふ者に守ゐ山に城を構なり
其人を心語あらし其に任せしまゝに無力に達成越
城に参て家事にして忠と城ともに持ち寄しへしと守りみす

是と其家臣か宇喜川了協両人か捕申し候 安方
百部村へ遣て宮山へ掛て宗家を責討手廻物か
家来に見せ其家に懸り備へ為さを本拠か遣候へく
家臣ハ勇く申し行り其是を一族家臣兵儀為へ国
心して捕か陥し其是を宇喜川馬協其に捕に至る
しむ事り申候
根さ子在金光要源郎宗高ハ宇喜多能家弟源ハ
中にて清為か安積と云其時とも宗高ハ善
從者宮山に行りて金光ハ宮山なとハ居
磨田町にて行り歓喜別監高り 其安源郎ハ

子宗高多子仕へて金光与太郎門と云宗高
多内家亡後長松村の民家に隠れし と云

備前軍記巻第三終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan